
ラストダンスのそのあとで

金本ちはや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストダンスのそのあとで

【Nコード】

N7730F

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

高校最後の文化祭は、静かに幕を閉じようとしていた。後夜祭に盛り上がるグラウンドで、里香はクラスメイトの侑二に声をかけられ……。若者たちの心は、恋に夢に大きく揺れる。フォークダンスとともに紡がれる、青春の調べ。

すでに陽は沈んだというのに、キャンプファイアに照らされ、あたりは真昼のように明るかった。

文化祭のシメを飾る後夜祭。一般客が帰ったあと、グラウンドの中央ではキャンプファイアが焚かれ、生徒たちはそれを囲むように輪になってフォークソングを踊る。

最近ではあまり見かけなくなった光景だが、里香の通うこの高校では今でも伝統行事として行われている。生徒たちの間に『古くさい』などの抵抗感はさほどなく、むしろ『やって当然』という意識が強い。

流れている曲は『マイムマイム』。キャンプファイアの周囲では生徒たちが手を取り合い、たまに歓声を上げながら楽しげに踊っている。

里香は少し離れた場所に座り、その様子をぼんやりと眺めていた。その背中に、ふと声がかけられる。

「藤野、踊らないの？」

振り返ると、クラスメイトの梶原侑二が立っていた。

「さっきまで踊ってたんだけど、ちょっと疲れちゃって」

「ふうん」

「梶原くんは？」

「俺はやつと後片づけが終わったところ」

侑二は答えながら里香の隣に腰を下ろした。

よく見ると、彼の着ている文化祭実行委員の黄色いＴシャツは、重労働を物語るように汗でぐっしりと濡れていた。

「そっか、お疲れ様」

「いえいえ」

里香のねぎらいに、侑二は軽く微笑んだ。

侑二とは、一年生の頃からずっと同じクラスである。最初の一年

間はそうでもなかったが、二年生になってから少しずつ話すようになった。

明るく屈託のない侑二は、男子が少し苦手な里香にも親しみやすい存在だった。一見すると調子に乗りやすいタイプのようだが、だれもやりたがらなかった実行委員を進んで引き受けるなど、実は結構しっかり者なのだ。後先考えずにその場のノリだけで騒ぐ男子との違いが、里香が信頼を寄せる理由だった。

「あ、そうだ」

侑二が何かを思い出したように声を上げた。

「自販機でジュース買ったなら二個出てきたんだけど、一個飲む？」

目の前に差し出されたのは、紙パック入りのオレンジジュース。

「えっ、いいの？」

「どうぞどうぞ」

里香はしばしためらったが、喉が渴いているような気がしたのも事実で、結局ありがたくいただくことにした。

「ありがとう」

「どういたしまして」

さっそくストローを取り出し、紙パックに差しこむ。ストローの先をくわえて吸いこむと、口の中いっぱい甘酸っぱい味が広がった。

「うお、酸っぱえ」

「さすが果汁百パーセント」

ひと口飲んでストローから口を離れた。いつの間にか曲は『マイムマイム』から次のものに移っていた。

曲の移行とともに、踊りの輪から何人かの生徒が抜ける。代わりにように、別の生徒たちが新たに加わった。

里香は戻ってきた生徒たちのなかに友人たちがいるかどうか探したが、ひとりも見当たらなかった。どうやら続けて踊っているらしい。よく体力が持つなあ、と密かに感心してしまう。

「しかし、あっという間だったよなあ」

「え？」

唐突な呟きに思わず視線をやると、侑二は遠くを見つめるように目を細めた。

「いや、文化祭がさ」

「ああ」

里香は頷いた。

「そうだねえ」

「はじまったばかりのときはさ、二日間もあんなのかよって思うんだけど。終わってみると、たった二日間って感じなんだよな」

「うん、わかる」

勉強に追われる日常を忘れ、浮かれ騒いだ二日間。ほんのわずかな時間だからこそ特別で、終わってしまうと切ないのだ。

けれど、一昨年や去年よりももっと切なく感じるのは気のせいだろうか。

高校最後の文化祭。

本当に、まるで夢でも見ていたような気分だ。

「そういえば、さ」

「ん？」

「藤野って大学どこ行くの？」

「あれ、言ってなかったっけ？ M女短大だよ」

M女子短期大学は看護師の養成校として名高い。看護師を目指している里香は、一年生のときからそこを志望校に決めていた。

「……M、女短大？」

「うん」

「……女子大？」

「そうだけど」

「………そっかあ」

なぜか侑二は、ひどく落胆したような顔をした。

「え、何？ あたし、気に障るようなこと言った？」

「や、こっちの話。気にしないで……」

そう言いながらも、彼は深々とため息をついた。

「そつかあ、女子大かあ……盲点だったなあ」

「盲点って？」

「うつん……おれてつきり、藤野つてK大とか行くのかと思ってた」
「えっ、K大なんか無理だよ！ あそこ、めちやくちゃ偏差値高いし！」

「藤野つて頭いいじゃん。それに嘉村^{かむら}も行くつて言つてたしさ」

「朝ちゃんはね。けどあたし、看護師になりたいんだ」

「看護師？」

侑二は驚いたように目を丸くした。

「うん。ずっと前から決めてたんだ」

里香は得意げに笑つてみせた。

「……すげえよなあ、藤野」

「なんで？」

「だつて、しつかり将来のこととか決めてるじゃん」

「まだなれるかどうかわかんないよ？」

「それでもさ、自分の……ビジョンつていうの？ そーいうのちゃんと持つてて……すげえよ」

「そんな 梶原くんだつて、学校の先生になるんだつて言つてたじゃない」

侑二は苦い表情を浮かべた。

「違えよ」

「何が？」

「教師になりたいつて……俺が望んだわけじゃないんだ」

里香は小さく息を呑んだ。

「……そーなの？」

「……俺んちつてさ、親父もおふくろも教師なんだ。死んだじいちゃんもそうでさ。で、やっぱ親は俺にも教師になつてほしいわけ。だから一応、進路希望は『教師』にしてきたんだ」

侑二の口調は、今まで聞いてきたなかで一番静かだった。淡々と

語る姿は、却って彼の押しこめてきた感情の大きさを窺わせた。

里香は何も言わなかった。いや、何も言えなかった。

胸にこみ上げてくる思いはある。だがそれをどんな言葉にして伝えればいいのか、どんな風に声をかければいいのか、わからなかった。

しばし沈黙が落ちる。

どちらもしゃべろうとはしなかった。侑二はキャンプファイアを見つめ、里香は彼の横顔を見つめていた。

やがて曲が中盤を過ぎた頃、里香が口を開いた。

「梶原くんのしたいようにすればいいんじゃないのかな」

侑二が振り返る。里香は彼の瞳をまっすぐ見据えた。

「他人事だから言えるのかもしれないけど……あたしはそう思う。したいことがあるならそれをすればいいし、したいことがまだ見つかってないならこれから探せばいいんじゃないかな」

「……でも」

「うん。簡単にはわかってもらえないと思う。けどやってみる前からあきらめるなんておかしいよ。難しいかもしれないけど、それでもがんばってみて」

里香は一度言葉を切ると、励ますような笑顔を作った。

「あたしも応援するよ。だって梶原くんの人生は、梶原くんのものでしょ？」

そつと肩を叩くと、侑二はなんとも不思議な顔をした。

泣き出しそうな、笑い出しそうな どちらとも言いがたい表情だった。

だがそれを里香が目にしたのは、ほんの一瞬のこと。侑二はすぐに俯いてしまった。

「梶原くん？」

里香は慌てて顔を覗きこもうとした。彼はふるふると首を横に振ると、『大丈夫』と小さく答えた。

「ごめん」

「うっん、あたしのほうこそ……なんか偉そうなこと言っちゃってごめんね」

しゅんとなつて謝ると、侑二が顔を上げた。

口元を押さえていたのではつきりしなかったが、どうやら笑っているようだった。目が少し潤んでいるように見える。

「ありがと」

小さな、けれどとても心のこもったひと言。

それを聞いた里香は、ようやくほっとした。

「家に帰ったら、言ってみるよ」

「うん、がんばって」

どこか晴れやかな、決然とした侑二に、里香はガッツポーズを試みせた。それを見て、侑二はぷっと吹き出す。

「あっ、ひどおい」

「ごめんごめん」

いつもの調子が戻ってきたようだ。もう大丈夫だろう。

ふと、それまで流れていた曲が終わり、続いてアナウンスが響いた。

《今年も無事に文化祭が終了しました。皆さん、お疲れ様でした。三年生はいい思い出は作れましたか？ 一、二年生は来年もがんばりましょう。それではいよいよラストです。曲はもちろん 『オクラホマミキサー』》

アナウンスが切れて曲が流れ出すと、男女ペアの生徒たちが次々に踊りの輪へ加わりはじめた。

後夜祭のラストの曲は、必ず『オクラホマミキサー』と決まっている。これは男女がペアになって踊る曲なのだが、この高校では特別な意味を持っていた。

それは、片想いの相手と一緒に『オクラホマミキサー』を踊ると両想いになれる、という言い伝えだった。

つまり、ラストの曲の相手に誘うのは好きだと告白することなのだ。

もちろんイエスならば申し出を受け、ノーならば断る。今キャンブファイアを囲んで踊っているのは、できたてはやはやのカップルたちなのだ。

曲に合わせて踊る生徒たちは、だれもが気恥ずかしげに笑っていた。見守る観衆からは口笛やひやかしの声が飛ぶ。

「もうラストかあ」

里香は少し羨ましい気持ちで踊っている恋人たちを見つめた。

「……………なあ、藤野」

「ん？」

振り返ると、やけに真剣な顔の侑二と目が合った。一瞬どきりとする。

ずっと侑二が片手を差し出した。

「踊ってくれない？」

もう一度、さっきよりも大きく、里香の心臓が飛び上がった。

それは、つまり。

「いやなら別にいいんだけど」

居心地悪そうに侑二は視線を逸らした。

里香はぼかんとしていたが、やがて口元を綻ばせた。

なんだか頂うなじがくすぐつたい。

今まで気づいていなかった気持ちを新たに発見した。それはきつとずいぶん前からあったもので、あまりにもぼんやりしていてわからなかった。

けれど、やっと形を現した。

確かめなくともわかる、侑二が持っているものと同じ想い。

「喜んで」

手を取ると、侑二は驚いたように瞬いた。

里香は立ち上がった。侑二はしばらく呆けていたが、やがてあとを追ってくる。

彼も笑っていた。

「早く行かないと終わっちゃうよ？」

「そうだな」

手をつなぎ、踊りの輪へ向かって走り出す。途端にこそばゆい歓声が上がった。

里香は思わず手を振ってみせた。キャンプファイアが近づいて頬が熱い。

だがそれはきつと、炎のせいだけではない。

明日から、また日常の再開だ。これから受験勉強が本格的になり、こんな風に騒げるのは今日が最後になるだろう。

苦しいのは自分のため。望む未来を手に入れるため。

それもわかつているけれど、今はまだこの照れくさいような幸せに包まれていたい。

この曲が終われば魔法は解ける。だからあともう少しだけ。すべては、このラストダンスを終えてから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7730f/>

ラストダンスのそのあとで

2011年1月15日19時56分発行